

〔資料〕

資本主義と近代国家（続・完）

ダグラス・ボーン

市川 泰治郎 訳

最近におけるイギリスのマルクス主義歴史書を「めぐって」二つの大きな動向がみられる。一つはマルクス主義歴史記述の数が増えてきたことである。その主要なもの——もちろん全部とはいえない——は封建制から資本主義への移行問題、とくに絶対主義論および18世紀以降のイギリス資本主義発展の本質論である¹⁾。第2はそれとは或る程度別の発展であるが、マルクス主義理論、ことに史的唯物論の性質をどう解釈するか、これにたいする論議の再燃である。これにはアントニオ・グラムシとルイ・アルチュセールの著作の英訳が出た影響が特別に大きい²⁾。しかし、この理論的展開を自分たち自身の歴史研究³⁾に結びつけたマルクス主義歴史家はこれまでのところイギリスではきわめて少数である。むしろ一部のもののあいだには、マルクス主義理論を忘れ、「アカデミックな名声」に心を奪われ、じつに特殊な主題の歴史にかんし、詳細をつくした著述を書いて、それで満足している傾向があり、最近は批判的的となっている⁴⁾。

以上二つの発展のなかで、筆者はペリー・アンダーソンの二近著『古代から封建制への通路』と『絶対主義国家の系譜』をとりあげる。これは前述の二つの動きの総合を狙ったもので、著者自身の言葉をかりていえば「二つの（動向の）中間地帯を踏査する」ことを企てた二部作として意義をもつものである。

著者はこの二部作により絶対主義国家をめぐって古代と封建制の関係を解明しようとしている。第一部の焦点は、古典古代の日常生活と政治世界、古典古代から中世世界への移行の性質とそれがヨーロッパ封建制の^{エヴォリューション}発展に与えた諸結果に絞られており、第二部はひきつづいて封建制の正統な政治後継者として規定される絶対主義国家の発展と性質の分析を課題としたものである。両著とも国家の諸形態の歴史と発展という広範な研究の一部として構想されている。著者のいうとおり、残念なことに、国家問題はこれまでマルクス主義者によって無視されてきた。とくに歴史的脈絡において国家を論じることが^{ゆるが}忽せにされてきた。この両著とも生産手段にかんして起こる経済的・政治的変化に関心を集中させたものではなく、主たる興味は政治面にある。けだし著者の示唆するところでは、階級闘争が決定的対決をみ、結末をみるのは、じつに政治の次元においてであり、生産関係は政治においてこそ転形を果すのであるから。

筆者がここでアンダーソンのこの二部作の書評によせて論じたいと思うのは、具体的な歴史研究にたいする史的唯物論の関連性はどうなるのか、国家の歴史的分析とは何であるのかという二つの問題である。

1. 理論のもつ意義

第一に一般的理論問題を取りあげる。アンダーソンは自分が職業的歴史家ではないことを隠さず、歴史的論議に介入する一マルクス主義者にすぎないとまずことわる。両著とも別に新史料を提供しているところはない。ただ、これまで大部分の史家が問題にしていなかった社会主義諸国の第二次文献をはじめヨーロッパの現在の研究水準を参考としその成果を使用している点において出色である。

アンダーソンは両著をどのような意味でも完結的であるとか最終的であるとかいってはいない。それらは「もう一つの歴史のための短い素描——討論のための初歩的材料」であるという。ただし同時に、両著にたいする論評が主として史的唯物論の領域内で行なわれることを望んでいる。

しかし、かれの意図が何であったにしても、また「新しい」マルクス主義用

語法に訴えていようとも、両著とも目的を歴史書であることに置くもので、構造においても形式においても大抵の史書と変わるところはない。どちらも初めに、理論的問題を提起して論議するような体裁をとっているものではない。また、史的唯物論の性格を理論的水準においてとりあげた最近の討論の要約もしようとしてはいない。たとえば、両著は長期的には国家を対象としているが、グラムシ、アルチュセールあるいはプーランツァスの論争には直接には触れていない。歴史の枠組に忠実な、確実な骨格をもって、諸国における封建制と絶対主義国家の発展を論じ、かつその比較研究を行なっている。

ただし、わたくしの見るところでは、かれが自己の理論的概念を明瞭に打ちだしていない点に、結果的には両著ともその内部において弱点と矛盾の多くを生むものが潜んでいる。たとえば「理論」と具体的な歴史知識とのあいだの一般的関係にかんして、かれは甚だ混乱した概念を抱いているように見える。かれは『絶対主義国家の系譜』への「まえがき」のなかで、一方には抽象理論があり他方には具体的現実があり、この両者のあいだを関連づけることが、或いは既述のように、媒介することが任務であると示唆している。マルクス主義は理論的に展開された史的唯物論という科学であるといえるかもしれない。大部分のマルクス主義者はこれまでのマルクス主義著作は具体的現象を漠然と理論づけしたものではけっしてないと示唆するであろうが、アンダーソンは従来のそれらの著作を批判して、特殊な、局地的な事例を解明すべき「抽象的一般性」との関係論じていないという。しかし、かれは理論をもって純粹に抽象的であり、具体的問題に関連をもたないものであり、また現実をもって、それはたんに人の知覚にのぼっているものにすぎないといおうとしているようである。しかも、両者がどのようにして結合されるかについては、何らリアルな示唆もあたえてくれていない。

自分の理論的立場を明示することに厳しくなかった結果として、かれは社会構成と絶対主義国家の性質とを論じるばあいに非マルクスの、とくにマックス・ウェーバー的な方法の世界へひきこまれるのである。『古代から封建制への通路』においては社会諸構成の「形態学」について云々し、さらに第二部で

はまた、かれのいう「理想的平均」を構築している。マルクスが『資本論』で資本主義生産様式について行なったふうに絶対主義国家の理論的構築を展開する代わりに、いろいろな絶対主義国家の比較研究によってこの理想的平均をつくりだしている。この二部作がかような大冊（合計して900ページに近い）になった理由の一つも、この理想的平均をつくるために、いくつかの国々の分析をせねばならなかったことにある。

アンダーソンは「歴史」にたいする史的唯物論の関係にかんして混乱している。その混乱が「生産様式」概念と「社会構成」概念との使い方において、あらわれている。かれは史的唯物論にかんする最近の議論のあるもの、とくに生産様式の継起をめぐる築かれた進化的歴史観にたいする反対を支持しているようであるが、しかし歴史の展開をどうみるべきかについては発言しようとしていない。歴史とは、生産様式のそれと区別されるべき社会構成の歴史なのか、どうか。アンダーソンは暫定的に歴史は生産様式の歴史であるとしている。しかし、両著の双方を通じて社会構成という語がつねに用いられている。だが、一度もその定義が出てこない。この点の不明瞭さが重大な誤謬につながってゆく。とくにいくつかの生産様式の結合をともなった絶対主義国家について、また特定の期間における絶対国家にたいして経済的基礎がもつ関係について論議するばあいには重大な誤謬の種をまいている。

ルイ・アルチュセールは社会構造という用語を論ずるにあたって、これを一定の歴史的状況における諸階級のグルーピングであり、三つの次元あるいは活動典型——経済実践・政治実践およびイデオロギー実践——をもつものとして定義している。かれにとっては、以上の実践の三形態いずれも他のたんなる相互反映であるとか、どれかへ互いに還元できるものとか考えるのは誤りなのである。しばしば政治的イデオロギー的实践は経済次元のたんなる反映であるといわれているが、アルチュセールはかような観念を拒否するのである⁹⁾。

アンダーソンは経済的実践にたいする政治実践およびイデオロギー実践の関係にかんして、それらは互いに反映し合うにすぎないものではないという点においてアルチュセールと同意見のようである。しかし、かれは何をもって社会

構成とみているのかについては何ら明示するところがなく、実際の歴史記述をみても、何らかの手がかりすらもそれ以上には与えてくれているわけではない。むしろ逆にいっそうの混乱さえ示しかねないのである。たとえば、古代ギリシャを論じるさいに社会構成という語を用いているが、特定の時期については用いず、1千年間にわたるヘレニズム諸国の出現については記述的に書いているだけである。同様に、第一部の終りのほうでノーマン人のイギリス征服時代の社会構成について語っているばあいも1066年のこの征服の結果については政治的变化に焦点をしばっている。したがって、かれの社会構成概念は理論的構造物であるよりはむしろ社会という用語の代用である。社会構成の概念はすべてのマルクス主義歴史家にとりまさに基本的重要性をもつものである。しかるに、アンダーソンのこの著書ではきわめて漠然たる形で使用されているにすぎなく、マルクス主義用語としての役割を果していないのである。

2. 国家の理論的諸問題

アンダーソンの二部作が提起する第二の大きな理論問題は国家またはその変種諸形態の歴史をどう論ずることが妥当であるかということである。国家の役割の問題や、何よりも政治およびイデオロギーの上部構造にたいする経済基礎の関係にかんする問題は近年いくたりかのマルクス主義者によって論議されてきた⁶⁾。しかしアンダーソンの同書において初めて、これにかんする歴史的諸問題がいくぶんなりとも論じられているのである。かれは、絶対主義と絶対主義国家の諸変種形態をいろいろ論じている。しかし、かれも所与の社会構成の内部における土台たい上部構造の関係にかんする理論問題の関連において絶対主義国家の概念を論じているのではない。かれは、ときにふれて「支配的」および「決定的」という用語を用いている。この二つの用語はアルチュセールのものである。アルチュセールは、これらの用語を「土台」および「上部構造」の概念よりも優るものとして用いることを提唱している。かれは「土台」、「上部構造」という用語は適当でないというのである。アルチュセールの見るところでは、すべて個々の社会構成において或いは経済的なもの或いは政治的なもの

の、或いはイデオロギー的なものが支配的になりうるのである。かれはいう。経済的土台の役割はどの次元に支配権があるかを決定するにある、と。支配的次元とは社会闘争が定式化⁷⁾される次元のことである。しかし、この用語を採用しながら、アンダーソンはその意味を説明しようともしていないし、また具体的な歴史状況にそれを適用しようともしていない。

その反面において、およそ絶対主義国家一般を論じるばあいには封建制との関係で言及するにすぎない。かれは絶対主義国家は「本質的には封建支配が再採用し再生した権力装置」であるという。かれは資本主義的展開およびブルジョアジーの興起が絶対主義に重要な諸結果をもたらしたことを認めたが、絶対主義国家の性格を資本主義的なものとして特徴づけることは一切拒否している。かれはマルクスその人が絶対主義国家をもって「ブルジョア固有の用具」であったと示唆していることを知りながら、もしも西ヨーロッパ絶対主義国家の構造をもっと綿密に研究するならば、マルクスの考え方は支持できないだろうとみているようである。近代初期においては、支配的な階級はまだなお封建階級であり、この支配^{ドミネーション}が外されるのは絶対主義が終末したときであったという。実際は封建的搾取の性質における諸変化が起こったにすぎなかったとする。農奴制崩壊と細分化された諸主権国家の成立にともなって、絶対主義国家が封建諸関係の強化と貧農＝平民大衆の隷従性確保の主要形態となったとアンダーソンはいうのである。

しかし、これらの考え方はけっして独創的なものではない。アンダーソンの意図がどうあろうと、この二部作におけるかれの見方は今日多くのマルクス主義歴史と余りちがわない。じっさい、国家の展開にかんする理論諸問題のうちの若干を具体的な歴史にたいして提起しようとしたにも拘らず、その創意を貫徹し得なかった。それが、このような考え方の類似性となって現われている。このような理論問題と具体的歴史との結びつきを無視することこそマルクス主義歴史家たちのあいだにみられる傾向だと自身いっていながら。

ごく少数の歴史家のみが社会構成の脈絡のなかで絶対主義の問題を提起した。その一人にソヴェットの歴史家 A. D. ルビンスカヤがある。その労作は

『フランス絶対主義，1620—29年』（ケンブリッジ，1968年）である。同書は絶対主義には資本主義的性格のほうが強いことを明らかにしているが、ただし、その立論はフランスについてのみ妥当すること、また具体的な社会構成の分析による限定的なものであることをことわっている⁸⁾。最近その論文が英訳されたが、そのなかで、「絶対主義の本質は諸階級の現実の関係のうちにある」といい、つづけて「人は絶対主義の概念を個々の国々の歴史にたいする各論的な具体的研究から展開させねばならない」とも述べている。著者の見解では、社会構成の具体的構造を明瞭にすることができないならば、絶対主義の特徴づけ、とくにその国家形態の特徴づけにも重大な誤りを犯しかねないというのである⁹⁾。アンダーソンも特定の国々の関連において絶対主義を論じている。しかし、論拠をそれら特定国家の社会構成の分析においていない。かれの絶対主義概念の根拠は封建制の先行者との関連における国家形態の比較研究にある。

アンダーソンの両著のもつ限界と歴史的意義の一端は『絶対主義国家の系譜』のロシアにかんする小節のうちにあらわれている。そこでは、かれのつくる絶対主義の「モデル」からみて、1917年の帝制国家は依然として封建国家であり、ロシア革命の対象は資本主義国家ではなかったこととなる。そこから進んで、かれはケレンスキーの暫定政権にはブルジョア国家装置を発展させる余裕の時間がなかったとし、ボルシェヴィキは西方における労働者運動の主敵であった資本主義国家と対決したものではけっしてなかったという。アンダーソンは国家の性格を国家諸装置の諸形態に矮小化してしまっている。1917年においてその諸装置との関連において支配していた階級の問題を無視している。1917年にかんする分析は当時の具体的な社会構成の分析にもとづかねばならないものであるが、それは別としてもアンダーソンの議論ではボルシェヴィキがブルジョアおよび資本主義国家との対決を怠った結果として封建国家からの遺産たるオーソリテリアニズム 威ステイティズム主義と国家主義が1917年以後も存続したということになるのである。

アンダーソンの両著は西方における資本主義の諸源流や先資本主義生産諸様式の関係における重要な理論問題をその他にもいくつか提起している。ここで

は、『系譜』においてアジア的生産様式にかんする有益な一節があることに注意したい。その節ではアジアにおける発展にたいするマルクス＝エンゲルスの諸著作を論じている。最近ハインデスとハーストが共著¹⁰⁾においてアジアの様式は非科学的概念であると論じているがアンダーソンはそこまではいっていない。しかし、この問題について何らかの確定的結論を出すにはもっと研究を深める必要があることを強く示唆している。

この書評はアンダーソンのこの二部作にたいするこれまでの大ていの書評者が、その理論的問題の側面を見逃しがちであるので、その面にことさら焦点を集中したものである。そればかりではなく、ちょうどマルクス主義歴史学が広範な理論的諸問題を意識しはじめつつある折柄なので、多くの書評のようにたんにこの二部作を歓迎するにとどまらず、むしろ歴史の「理論化」の企てを分析し批判する必要に答えようとしたものである。

マルクス主義歴史学は長年の守勢を破っていまや、ようやく新しい生面を開き始めつつある。しかし、その前進は「流行」に妥協したり、マルクス主義理論における新しい発展を拒否したりするものであってはならない。

（暫定訳）

原注

- 1) たとえば17世紀ヨーロッパ危機に関し特にホブズボームとデヴィッド・パーカー*の間で大きな論争がある。初め『サイエンス・アンド・ソサエティ』で公開された資本主義移行論争は最近ニュー・レフト・ブックスの一冊として複製された。
- 2) Gramsci, *Prison Notebooks* (London 1971); L. Althusser & E. Balibar, *Reading Capital* (London 1970) かれらの思想の意義については1974年に党歴史部会の研究会で討論されたが討論結果は公にされていない。
- 3) John Foster はその *Class Struggle and Industrial Revolution* (1974) で最近のマルクス主義的論争に照らして階級と階級意識の考え方をとりあげている。Martin Jacques は *The General Strike*, ed. J Skelley (London 1976) に収めたゼネストの結果についての論文のなかで階級意識に関しグラムシの考え方を利用している。しかしアルチュセールの考え方はまだイギリス史家によって十分にとりあげられていない。
- 4) Gareth Stedman Jones, 'History—the Poverty of Empiricism', R. Blackburn

- (ed.) *Ideology and Social Sciences* (London 1972) をみよ, フランスのマルクス主義歴史家 P. Vilar は 'Writing Marxist History', *New Left Review*, No. 80, 1973 において, もっと大きい範囲の問題若干を論じた。
- 5) K. Tribe and S. Macintyre, *Althusser and Marxist Theory* (1975 ed.) はこれらの思想を要約している。
- 6) Gramsci, *Prison Notebooks*; Althusser, 'Contradiction and Overdetermination', *For Marx* (London 1969) および 'Ideology and Ideological State Apparatuses', *Lenin and Philosophy* (London 1971).
- 7) Tribe and Macintyre, p. 8. をみよ。
- 8) *French Absolutism 1620-29* (Cambridge 1968).
- 9) 'The Contemporary Bourgeois Conception of Absolute Monarchy', および Littlejohn が *Economy and Society*, Vol. 1, No. 1. に寄せたこの著書にたいする重要な論文をみよ。
- 10) *Pre-Capitalist Modes of Production* (London 1975).
- * (訳注) David Parker, *Europe's Seventeenth Century Crisis, Our History*, Pamphlet 56, Winter 1973. がある。

訳者あとがき

本誌第15巻第3号と本号との2回にわたり訳出紹介した二つの書評論文*はもとイギリス共産党歴史部会が1975年10月に行った先資本主義生産様式に関する研究会**に提出された基調報告で機関誌『アワー・ヒストリー』66号***に収められた。同歴史部会に關しては歴史学雑誌『パスト・アンド・プレゼント』などとの関連においてやや詳しく時代状況のなかで紹介する予定であったが, 資料の一つに Hobsbawm 'The Historians' Group of the Communist Party, Maurice Cornforth (ed.) *Rebels and their Causes*, London, 1978 があることのみを付記してこれを他日に譲る。

* 前回 (本誌第15巻第3号) 掲載の「資料・資本主義と近代国家」と題する訳の原文はホブズボームを著作権者とし (© Eric J. Hobsbawm 1976) それに続きここに掲載する訳の原文の著作権はダグラス・ボーンに帰属する (© Douglas Bourn, 1976) ものである。

** the text of a talk given to the conference on Pre-Capitalist Modes of Production, organised by the Communist Party History Group in October 1975.

*** *Our History 66* (summer 1976), published by the History Group of the Communist Party of Great Britain.